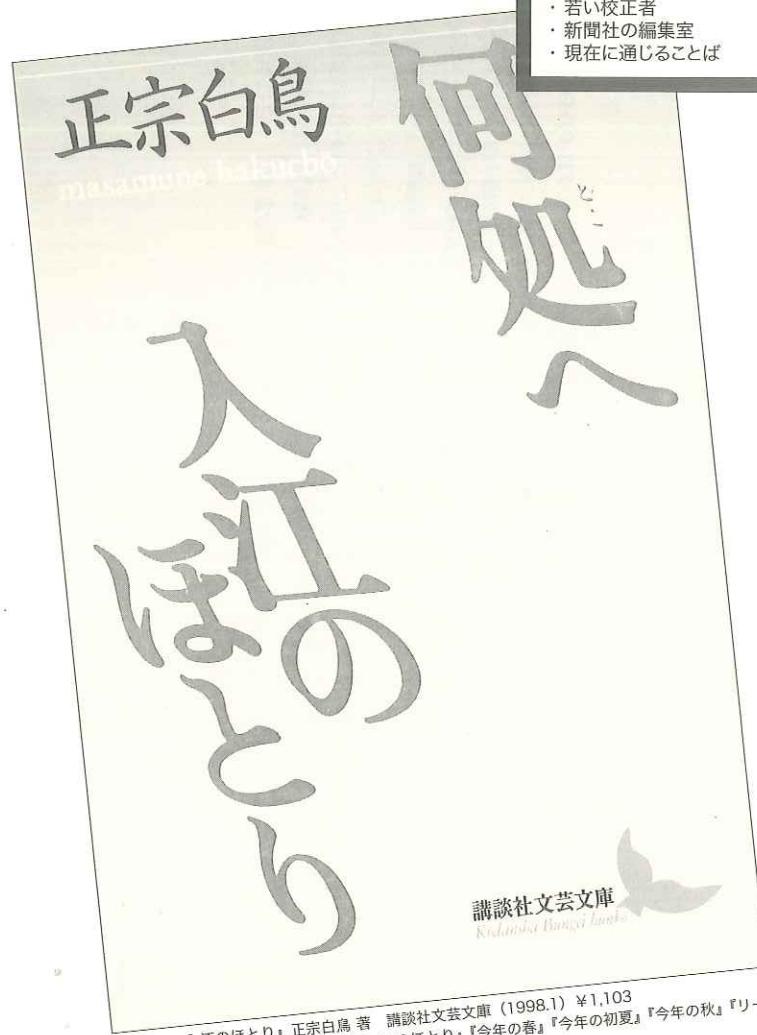


5-01

塵埃

じんあい

- ・若い校正者
- ・新聞社の編集室
- ・現在に通じることは



『何處へ・入江のほとり』正宗白鳥著 講談社文芸文庫(1998.1) ¥1,103
収録作品:『塵埃』『何處へ』『微光』『入江のほとり』『今年の春』『今年の初夏』『今年の秋』『リーフ』
兄さん

■書誌

初出は「趣味」明治40(1907)・2。『紅塵』所収、明治40・9、西本波太刊。

みどころ

この主人公・設定は、明治時代の終わりごろに書かれたとは思えないほど、現代性を保っている。新聞社の編集室で校正係をする主人公。若い彼からすればこのような職場でおめおめと一生を過ごすなんて死んでもいやなこと。まだこれは仮の姿だといいきかせながら時間だけが過ぎていく。まさしく今でも通用するような課題だが、この設定だけではこの小説にとりわけ注目するには値しない。ここに使われていることはよくみると古い。しかし語彙が古いといつても、これらのことは当時の風潮や美意識に従うように書かれているのではなく、仰々しい表現も含めてことば選

びが書き手の側に立ってなされている。ことばが「もつ」ということはこういうことなのだと、主人公の焦りとともに（私たち）に教えている。

あらすじ

年も暮れ。新聞社の編集室では原稿の上がった声や事件の話などが交わされている。そんな中、編集室の隅で校正の仕事をしている「予」。糊口をしのぐために始めた仕事でもう三ヶ月にもなった。社内でも年少の組になる「予」は、このままでこの仕事を続けるとなればこの場で死んでやると思っている。その向かいには創立以来三十年以上も働いている小野君が座っている。月給日の今日、「予」は小野君を

飲みに誘う。二人で本郷の「蛇の目鮓」に行くと、普段無神經な小野君は酒の入った勢いで愚痴をいいはじめた。はじめのうちは波の中でバチャバチャやっているが、大きな波が何度もなくくればどうせかなわないから勝手にしてるというふうになるというのだ。一度困って増給を願い出たところ、不服なら辞めるといわれたという。次の日、小野君はもとの表情のない石地蔵に戻っていた。「予」はおれには将来があると心を慰めながら、また校正の仕事をやつづけるのだった。(小峰慎也)

『自然主義文学盛衰史』正宗白鳥著
講談社文芸文庫
(2002.11) ¥1,155

『新編 作家論』
正宗白鳥・高橋英夫著
岩波文庫 (2002.6) *

『人生の幸福 他二篇』正宗白鳥著
岩波文庫 (1951.6) *

正宗白鳥
まさむねはくちょう

明治12(1879)・3・3～昭和37(1962)・10・28。小説家・劇作家・評論家。本名忠夫。岡山県生。早くからキリスト教に興味を示し、東京専門学校在学中受洗。卒業後、読売新聞社に入社して劇評等を手がける傍ら、『塵埃』(明40)『何處へ』(明41)で自然主義作家としての地位を獲得した。その後は『人生の幸福』(大13)などの戯曲でも文壇の注目を集め、文芸評論家としても一家をなした。昭和25年文化勳章受章。『正宗白鳥全集』全30巻(昭58～61、福武書店)(大井田義影)